だから私はタピオカミルクティーに さよならしなければならない

Kotomi LI (李琴峰 : Chinese-Japanese Translator)

✉ www.likotomi.com

(日本) 日中二言語作家、翻訳家。小説『独り舞』(原題「独舞」)にて第60回群像新人文芸賞優秀作を受賞。2019年、小説『五つ数えれば三日月が』で、第161回芥川龍之介賞、第41回野間文芸新人賞候補。

The Reason Why I Should Part Ways with Tapioca Milk Tea

When meeting with those from overseas countries, people tend to form a perspective on them based on their nationalities, thereby ignoring individual distinctiveness. As for me, since I am from Taiwan, people often assume my personal characteristics, from my taste in food to my core values, based on their idea of what constitutes a “standard or stereotypical” Taiwanese person. Some even become suspicious of me if I act in a way that is contrary to their expectations, and this makes me uncomfortable. As can be seen from the history of Yonaguni, borders are sometimes arbitrary and highly unstable, and thus, it is unreasonable to try to understand people based on them. In light of this and based on my own experience, in this essay I suggest that people should see each other not according to national categories, but as individuals.

Keywords Tapioca(タピオカ), Borderline(国境線), Yonaguni(与邦国), Taiwan(台湾)

タピオカブームなるものが来ているようである(というかそろそろ衰退か?)。

周知の通り、タピオカドリンクというのは台湾発の飲料だ。台湾で爆発的に流行った

のち、欧米にも進出した。二〇一五年に初めてアメリカへ旅行に行き、街角で賑わう台湾発のドリンクスタンドを目にした時はかなりびっくりした。距離が近い中国や香港ならまだしも、遠い海を越えてアメリカにまで店舗を展開したのだから驚きものである。逆に距離の近い日本では、当時はまだほとんどその類のドリンクスタンドが見えなかった。

ところがとうとう、日本にもタピオカブームが来ているのだ。

このブームの到来を喜ぶ台湾出身者や台湾関係者は大勢いるらしい。「タピオカドリンクは台湾の光だ」とはしゃぐ人もいるし、台湾の若者が台湾の食文化を日本で広めるためにドリンクスタンドをオープンしたところ成功を収めた、なんていう美談も時々目にする。しかし、街に次々と展開されるタピオカドリンクの店舗、その店舗に並ぶ長蛇の列、「タピ活」「タピリスト」「タピる」のような流行語、タピオカを取り上げるテレビのワイドショーやネットのトレンド、タピオカのインスタ映えの写真、タピオカランドという謎の施設、しまいにはタピオカオムレツにタピオカ麻婆にタピオカ筑前煮、そしてタピオカのアクセサリーからストラップからテンガカップまで……とかくタピオカでゲシュタルト崩壊を起こし眩暈がしてしまいそうなこの社会現象を、私は常に冷めた目で見ています。

何を隠そう、私はタピオカが嫌いなのだ。

私にとってタピオカの存在は、子供時代からの謎である。

そんなもちもちしていて噛んでも噛んでも噛み切れないものを、一体なんで人々は

飲み物の中に入れて好んで飲んでいる(食べている?)ののだろうか。人々は喉が渇いたからこそドリンクを飲むのであって、飲むからにはごくごく飲みたいのであって、そのドリンクの中にごくごく飲むことを邪魔してくる物体を入れるというのは、一体どういう了見だろうか。

えー、台湾人のくせに！と、これまで何度言われたことか。

タピオカだけじゃない。パイナップルケーキもマンゴーも蚵仔煎も、サツマイモご飯も四神湯も杏仁茶も、台湾料理とされているものの多くを、私は嫌いなのである。というより、そもそも食べ物として認識していないのである。夜市(夜市自体は好きだ)を漫ろ歩きしていても、これらの料理は自動的に目のフィルターに濾過され、脳の認識範囲に入らないのである。

この通り私は偏食者である。辛いものも苦いものも酸っぱいものも、魚介類も生野菜も味覚的には受け付けられないので、食事会や飲み会では散々苦勞してきた。「これ、辛くないよ？」と言われて食べたものが辛くて舌が火傷しそうになったり、「全然酸っぱくないから」と言われて飲んだものが酸っぱくて頬っぺたが萎んで抜け落ちそうになったり、これまでの経験から人間不信になってもおかしくないレベルである。どうやら私にとっての「辛い」「酸っぱい」の境界線は他人とはかなり違うようだ。他人が引いた境界線への盲信は禁物である。

日本に来てから、自分は辛いもの／苦いもの／酸っぱいもの／海鮮が食べられないと表明すると、往々にして「台湾ではあまり辛いもの／苦いもの／酸っぱいもの／海鮮を食べないの？」と言われる。十回で九・五

回は言われる。耳にタコができそうである。その度に心の中で叫んでいる。「台湾では食べないのではなくて、私が食べないのだ！お願いだから、私を『台湾人』というカテゴリーとしてではなく、個人として見て！」と。

もちろん、こう見えても小心者だからこれはあくまで心の叫びであり、よっぽどの良い友人でもなければそうは言いづらいのである。しかしそうしたマイクロ・アグレッション(悪意なき、小さな差別)を受ける度に、溜息を吐かずにはいられない。たとえ台湾から日本に渡り、物理的な「国境線」を越えたとしても、人々の心の中にある無形な「国境線」までは越えられていないようだ。

私は時々不思議に思う。どうやら人々が想像している「国境線」なるものはとても厳然としていて、話す言葉から住む家の様式、慣れている交通手段から物事に対する考え方、政治観価値観そして食べるものまでも、その線によって全てが決まるようである。臭豆腐を食べない台湾人だって、納豆を食べない日本人だっているのだから、少し考えてみればそんなことはあり得ないと分かるはずなのに、人々は国境線の向こうにいる他者と対峙するといとも簡単に個体への想像力を失い、ついその線で全てを解釈しようとしがちである。

歴史を紐解けば、国境線というものはふとした拍子にいとも簡単に移り変わるものであることが分かる。それは決して固定したものではなく、常に変動する可能性を内包していて、場合によっては曖昧性すら帯びるものである。最近小説の取材で、与那国という西国境の島に行ってきたが、この島

はまさに好例である。

十六世紀以前に与那国は絶海の孤島で、海を通して色々な島と緩やかな交流を持っていたものの、どこの国にも隷属しなかった。一五一〇年に琉球の侵攻により、与那国は初めて琉球王国の版図に入り、一六〇九年の薩摩藩による琉球侵攻以降、薩摩に対して納税せざるを得なくなった。殺戮による口減らしを蔓延させた人頭税の施行もおよその時期である。一八七〇年代の琉球処分によって与那国は大日本帝国の一部となったが、日清戦争後に台湾も大日本帝国の領土に入り、一一一キロしか離れていないこの二つの島は盛んな人的・物的交流を開始した。与那国の人々は、進学先、就職先、食料や生活物資を帝国の内地よりも、至近の台湾島に求めたのである。しかしいざ敗戦してみると、大海原にいきなり国境線が引かれ、それまで与那国の人々の生活を支えていた台湾との海上貿易は一夕にして違法な密貿易となった。沖縄と共にアメリカの占領下となった与那国は十分な物資が与えられず、台湾との「密貿易」を続けるしかなかった。与那国の歴史は、その時々の方針や国々の勢力によって決められた国境線に翻弄される歴史、と言い換えてもいい。この研究論集のタイトルは『跨境』なのだが、島民からすれば、跨境も何も、勝手に境界線を引かれているだけなのに、ともどかしい気持ちになるのではないかと想像する。

跨境も何も、勝手に境界線を引かれているだけなのに——この地球という星、見渡せぬ海原、荒漠たる蒼穹、そこに人類が勝手に引いた国境線がまるで子供の落書きのように思われる人は、私だけだろうか。ただの子供の落書きなのに、私達は無力にも翻弄

され、規定され、場合によっては食べるものにまで先入観を持たれる。「〇〇人」である以前に、私達は独立した、一個の人間としてこの世界に生まれたはずなのに。国境線だけではない。人種、性別、性的指向の境界線についても、同じことが言えると思う。そうした属性による規定から解放され、真に一個の人間として互いに向き合えるようになるその時こそ、「跨境」は本当の意味で達成され得るのではないだろうか。

だから私はタピオカミルクティーにさよならしなければならない。パイナップルケーキにもマンゴーのかき氷にもだ。台湾人だからでも、台湾人離れているからでもない。私は独自の好悪、独自の価値観と世界観を持っている、李琴峰という一個の人間だからである。